

文化の森てんえい

令和2年8月10日発行



図書室だより

Vol.51



いつも、文化の森てんえい「図書室」をご利用いただき、ありがとうございます。

7月19日（日）に文化の森てんえい多目的ホールにて読み聞かせ会が行われました。絵本や紙芝居の朗読に、皆さん楽しい時間を過ごしていました。（*^▽^*）
次回は、8月30日（日）14時からです。是非、遊びに来てください！！



おすすめ！ したい本を紹介いたします！

【F・Kさんおすすめ】『おんな城主直虎』第一巻～第四巻

森下佳子・作 ノベライズ・豊田美加 NHK出版



「井伊」と聞いて有名な大名と言われたら、私はふたりしか思い出せない。ひとりは、江戸後期の安政の大獄で暗殺された井伊大老。それと徳川家康の家臣で井伊直政である。ふたりの「井伊」は彦根藩だったがルーツは静岡県浜松の北の井伊谷だと言う。そしてそこには、井伊直虎という戦国時代を生き抜いた女城主がいたという。

直虎は、井伊谷をおさめていた井伊家の当主、直盛の一人娘に生まれ、近隣の大獄、今川、武田、徳川の野望に翻弄されながらも、井伊谷の民のために必死に世を渡っていく。しかし戦国の世の習いとして、戦、調略、裏切りなどで、数々の家臣を失っていく。それは、私たちが知っている戦国武将の華やかさではないが、このような星の数ほどもいた、小国の気持ちに親近感を覚える。本は、大河ドラマと同様の構成なので非常に読みやすい。

【K・Sさんおすすめ】
ブライアン・リーズ/作

『フォックスさんのにわ』
せなあいこ/訳



フォックスさんは、犬と暮らしています。なにをするのもどこに行くのも2人は一緒です。フォックスさんと犬は庭仕事が好きで、2人の作る庭はとてもステキな庭です。フォックスさんにとって犬は大好きな家族です。でも、ある日……。私も犬を飼っていたので、フォックスさんの気持ちが、痛いほどわかります。悲しみに荒れてしまったフォックスさんの気持ちが、絵を通してひしひしと伝わってきます。でも、徐々に変わっていくフォックスさん。最後は涙が溢れてほっこりして嬉しくなりました。絵もとても素敵な、おとなにも読んでほしい絵本です。個人的にはフォックスさんの長靴好きです。

森の美術館 8 August



【新着図書のお知らせ】

■文庫・一般・エッセイ・実用書■

『江戸川乱歩傑作選』江戸川乱歩
『きんぎょの夢』向田邦子
『あ・うん』向田邦子
『女の人差し指』向田邦子
『穏やか貴族の休暇のすすめ。』3 峰
『穏やか貴族の休暇のすすめ。』4 峰
『じんかん』今村翔吾
『ほたる茶屋』藤原緋沙子
『五年後に』咲沢くれは
『少年と犬』馳星周★第163回直木賞受賞
『去年の雪』江國香織
『語らいサンドイッチ』谷瑞恵
『鬼滅の刃 しあわせの花』矢島綾
『鬼滅の刃 片羽の蝶』矢島綾
『女帝 小池百合子』石井妙子
『気がつけば、終着駅』佐藤愛子
『右向け〜っ、左！！』水森亜土
『本や紅茶や薔薇の花』陸奥A子
『夏井いつきの 日々是「肯」日』夏井いつき
『免疫力をあなどるな！』矢崎雄一郎
『子どものうつがわかる本』下山晴彦
『あなたのスマホがとにかく危ない』佐々木成三
『10代から身につけたい ギリギリな自分を助ける方法』井上祐紀
『スッキリ家事でお金を貯める！』ののこ
『ナチュラルおせんたく大全』本橋ひろえ
『ワードローブ100%手作り服になりました。』津田蘭子
『どんな服でも似合う人になる 着こなしの法則』森川和則

【新着図書のお知らせ】

■えほん・児童書■

『ふしぎ駄菓子屋銭天童』12 廣嶋玲子
『ふしぎ駄菓子屋銭天童』13 廣嶋玲子
『この海を越えれば、わたしは』ローレン・ウォーク
『中くらいの幸せの味』みとみとみ
『プティ・パティシエールマカロンは夢のはじまり』工藤純子
『プティ・パティシエール恋するショコラはあまくない？』工藤純子
『プティ・パティシエールひみつの友情マドレーヌ』工藤純子
『5分後に意外な結末オレンジ色に燃える呪文』桃戸ハル
『5分後に意外な結末エメラルドに輝く風景』桃戸ハル
『さらに！ざんねんないきもの事典』今泉忠明
『かさかあしてあげる』こいでやすこ・さく
『ぞうくんのあめふりさんぽ』なかのひろたか さく・え
『えだまめ』こがようこ
『ちいさいももちゃんあめこんこん』松谷みよこ・文 中谷千代子・絵
『えんまとおっかさん』内田麟太郎・作 山本隆・絵
『はっぱのおうち』征矢清・さく 林明子・え（大型絵本）



★おすすめ本を書いてみませんか！

対象は文化の森てんえい『図書室』にある本です。
投稿文字数は200文字程度
掲載者にはお礼として**記念品**を贈呈致します。
皆様のご応募、お待ちしております。





ふたりしか思い出せない。ひとは、江戸後期の安政の大獄で暗殺された井伊直政である。このふたりの「井伊」は彦根藩だったが、ルーツは静岡県浜松の北の井伊谷だと言う。そしてそこには、井伊直虎という戦国時代を生き抜いた女城主がいたという。

直虎は、井伊谷を治めていた井伊家の当主、直盛の一人娘に生まれ、近隣の大獄、今川、武田、徳川の野望に翻弄されながらも、井伊谷の民のために必死に世を渡っていく。しかし、戦国の世の習いとして、戦、調略、裏切りなどで、数々の家臣を失っていく。それは、私たちが知っている戦国戦国武将の華やかさはないが、このような星の数ほどもいた小国の気持ちに親近感を覚える。

本は、大河ドラマと同様の、構成なので非常に読みやすい。